

□メシアに結び合わされること

□これまでの学びとの関係

聖霊の5つの働きの中の第三、「**聖霊のバプテスマ**」について、次のように学んだ。(参照、2022年4月24日、資料20～24ページ)

1. I コリ 12:12～13・・・聖霊のバプテスマによって、信者は、「一つのからだ」、「キリストのからだ」と呼ばれる、**普遍的教会の一員とされた**。一人ひとりの信者は、そのからだの中の部分である。
2. ロマ 6:1～14・・・聖霊のバプテスマは、「キリスト・イエスにつくバプテスマ」、「その死にあずかるバプテスマ」とも呼ばれる。信者は信じたときに皆、このバプテスマを受けて、**キリストに結び合わされた**。キリストの死にあずかり、キリストとともに葬られた。それは、キリストの復活にあずかり、新しいいのちの中で信者が歩むためである。信者が新しいいのちに歩むことは、霊的復活である。

このように、聖霊のバプテスマは、第一に、信者を普遍的教会の一員とするものである。そして、第二に、信者をキリストの死と葬りと復活とにつなぎ、信者を新しいいのちの中で歩むようにさせるものである。

この二つの作用は、人が福音を信じたときに、一回限りで起きたことであり、取り消しも撤回もできない、神のわざである。

本日の内容、「メシアに結び合わされること」は、聖霊のバプテスマの、第二の作用である。本日、あらためてこのテーマを取りあげるのは、**信者がメシアと結び合わされたことが、信じた後のスピリチュアル・ライフのために、とても重要**だからである。

■「メシアに結び合わされること」のアウライン

1. **意味**・・・メシアに結び合わされるとは、どういう意味か。
2. **手段**・・・どのようにして、メシアに結び合わされるのか。
3. **目的**・・・何のために、信者はメシアに結び合わされるのか。
4. **地位**・・・メシアに結び合わされると、「キリストにある（メシアにある）」という地位を受ける。それは、どのような地位か。
5. **実践**・・・「キリストにある（メシアにある）」という地位は、人が自分の行いや努力で受けるものではないが、それを受けた信者には、その地位に応じた責任がある。信者は、何を実践しなければならないか。
6. **バランス**・・・【神が何でもしてくださる】ではないし、【人がすべてを行う】でもない。バランスが大切である。

1. 意味・・・メシアに結び合わされるとは、どういう意味か。
 - (1) 「メシアに結び合わされる」とは、信者がメシアと一体とされること、特にメシアの死と葬りと復活に結合される、という意味である。人が福音を信じたときに、聖霊のバプテスマによって、メシアと一体とされる。
 - (2) そのため、同じ信者であっても、旧約の聖徒たちとは違い、新約の教会時代の信者は、「キリストにある聖徒たち」（I コリ 1：2、エペソ 1：1）と呼ばれる。
2. 手段・・・どのようにして、メシアに結び合わされるのか。
 - (1) 聖霊のバプテスマによる

コロ 2：11～12 キリストにあつて、あなたがたは人の手によらない割礼を受けました。肉のからだを脱ぎ捨てて、**キリストの割礼**を受けたのです。バプテスマにおいて、あなたがたはキリストとともに葬られ、また、キリストとともによみがえらされたのです。キリストを死者の中からよみがえらせた神の力を信じたからです。

ロマ 6：3～5 それともあなたがたは知らないのですか。**キリスト・イエスにつくバプテスマ**を受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたのではありませんか。私たちは、**キリストの死にあずかるバプテスマ**によってキリストとともに葬られたのです。それは、ちょうどキリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、新しいいのちに歩むためです。私たちがキリストの死と同じようになると、キリストと一つになっているなら、キリストの復活とも同じようになるからです。

- (2) 聖霊のバプテスマについて、5つのポイントがある。
 - ① すべての信者が受けた
 - ② 信じたとき1回限りである。何回も受けるものではない
 - ③ 受けたという感覚や体験は、ない
 - ④ それ自体は何かの力を現わすものではないが、結果として信者に力を与える（使徒 1：8）
 - ⑤ 「キリストにある」という、権威を伴う地位を与える（エペソ 2：6）。その権威は霊的なものであるゆえに、霊的な戦いにおいて有効である（ヤコブ 4：7）。

3. **目的**・・・何のために、信者はメシアに結び合わされるのか。

(1) 目的は、3つある

- ① 「キリストにある」という地位を受ける
- ② 新しい環境に入れられる
- ③ 新しい環境の中で生きるときの2つの原則に、つながる

(2) 「キリストにある」という地位を受ける

- ① 人は生まれたときから、アダムの子孫として死に支配されている。聖書には「アダムにある」という用語は使われていないが、キリストとアダムを対比する説明が、ロマ5:12~19、Iコリ15:45~49にある。信者となる前の人は、「アダムにある」という地位に置かれていたのである。
- ② 人が福音を信じると、「キリストにある」という地位に移される。
- ③ 2つの相対する地位を比較すると、50ページの表に見るように、全く違う。

(3) 新しい環境に入れられる

- ① その環境とは、御子の支配する領域である。信者は、暗闇＝サタンの力から救い出され、キリストの支配の中に移された。

コロ 1:13 **御父は、私たちが暗闇の力から救い出して、愛する御子の支配の中に移してくださいました。**

- ② 信じる前は罪の奴隷であったが、信じて聖霊のバプテスマを受け、義の奴隷へと立場が変わった。

ロマ 6:17~18 **神に感謝します。あなたがたは、かつては罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規範に心から服従し、罪から解放されて、義の奴隷となりました。**

- ③ その環境とは、霊的に復活した信者が、新しいいのちに生きる、スピリチュアル・ライフの領域である。

ロマ6:4 私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それはちょうどキリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちが新しいのちに歩むためです。

- ④ 信者は今や、**新しいのち、新しい性質**にあって生きている。信者は、メシアに似た者となるように、その内面が日々造り変えられていく。

コロ3:9~10 あなたがたは古い人をその行いととも脱ぎ捨てて、**新しい人**を着たのです。**新しい人**は、それを造られた方のかたちにしたがって新しくされ続け、真の知識に至ります。

Ⅱコリ 3:16~18 イスラエルの子らの理解は鈍くなりました。今日に至るまで、古い契約が朗読される時には、同じ覆いが掛けられたままで、取りのけられていません。それは**キリスト**によって取り除かれるものだからです。確かに今日まで、モーセの書が朗読される時はいつでも、彼らの心には覆いが掛かっています。しかし、人が**主**に立ち返るなら、いつでもその覆いは除かれます。**主**は御霊です。そして、**主の御霊**がおられるところには自由があります。私たちはみな、覆いを取り除かれた顔に、鏡のように**主**の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、**主と同じかたち**に姿を変えられていきます。これはまさに、**御霊なる主**の働きによるのです。

ロマ8:29 神は、あらかじめ知っている人たちを、**御子のかたち**と同じ姿にあらかじめ定められたのです。それは、多くの兄弟たちの中で御子が長子となるためです。

- (4) メシアに結び合わされたことは、私たちが、②の新しい環境の中で、スピリチュアル・ライフを生きるときの2つの原則に、つながる。

- ① 第一原則・・・**自分がメシアと一体となっていると、認める。そして、自分は、罪に対して死んだ者であり、神に対して生きている者だと、認める。**

ロマ6:11 あなたがたもキリスト・イエスにあって、自分は罪に対して死んだ者であり、神に対して生きている者だと、**認めなさい。**

「キリスト・イエスにあって」とは、自分がメシアと一体になっている状態を指す。特にメシアの死と葬りと復活につなげられたことを指す。自分もメシアといっしょに十字架にかかって死んだ、自分もメシアと共に葬られた、そしてメシアが復活したように、自分も霊的に復活して今は新しいいのちの中で歩んでいる、と認めることである。

信者は、聖霊のバプテスマを受けて、メシアと結び合わされたが、それは信者の意識レベルで起きたことではない。信者は、聖霊のバプテスマにおいて、何か感じたとか、体験したというわけではない。それを真実として信仰によって受け取り、今、自分はメシアと一体となっていると認め続けることが、スピリチュアル・ライフを生きるときの第一原則（ロマ6：11）である。

- ② 第二原則・・・今、生きているのは、もはや自分ではなく、メシアご自身が自分の中で生きておられる、と体験的に知る

ガラ 2：19～20 *私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。今、私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです。*

第一原則に立ってスピリチュアル・ライフを生きていくと、次のことを確信するようになる。今、自分が生きているのは、もはや自分ではなく、メシアご自身が自分の中で生きておられるのだ、と。これは、スピリチュアル・ライフを生きるときの第二原則である（ガラ2：20）。

3. 地位・・・メシアに結び合わされると、「キリストにある（メシアにある）」という地位を受ける。

この地位は、人が自分の行いや努力で受けるものではない。神のわざであり、神から与えられたものである。では、「メシアにある」とはどのような地位であるのか？ 次の5つのポイントを挙げて、説明する。

(1) 罪に対して死んだ、という地位

メシアの死に結び合わされた、すなわち、メシアと共に十字架につけられた。メシアが十字架の上で死んだとき、私達も死んだ（ロマ6:3、ガラ2:20、コロ1:21~22）。

これが意味するのは、**私達らは罪に対して死んだ**、ということである。

この罪とは、私達の内側にある罪の性質である。信者になる前は、私達らは罪の奴隷であった。信者になったあとも、私達らの中には罪の性質が残っている。それは消されてはいない。しかし、私達らは死んだのである。死者となった私達らは、もはや罪の性質に従う義務はない。

(2) 葬られて罪から解放された、という地位

メシアの葬りに結び合わされた、すなわちメシアと共に墓に葬られた（ロマ6:4、コロ2:12）。

これが意味するのは、信者は、**サタンが支配するこの世から、墓の中へ移された**ということ、その墓では、もはやサタンの支配も、罪の性質による支配も、私達らに及ばない、ということである。**私達らはサタンと罪の性質の力から解放された**のである。

そして、その墓の中で、私達らは、新しく生まれる＝再び生まれる＝霊的に復活するのである。

(3) 霊的に復活して神に対して生きている、という地位

メシアの復活に結び合わされた、すなわち、私達らもメシアと共に復活した（ロマ6:4~5、エペソ2:5、コロ2:12、3:1）。これが意味するのは、**霊的に復活した私達らが、新しいいのちにあって歩んでいる**、ということである。私達らは、**今や、神に対して生きている**のである。

(4) この地位をまとめて言うと (ロマ 6:6~11)

- ① メシアと共に十字架の上で死んだ・・・罪に対して、死んだ
- ② メシアと共に墓に葬られた・・・罪とサタンから、解放された
- ③ メシアと共に復活した・・・神に対して、生きている

(5) この地位について教える重要箇所は、ロマ 6:1~10。その中から、キーワードを3つ説明する。

① 2節「罪に対して死んだ」

聖書で「死」とは分離である。罪に対して死んだ、ということは、罪の性質から分離された、ということである。信者は、罪の性質の力から分離されたのである。罪の性質の力とは、人に継続的に罪を犯させる力である。信者は、罪の性質の力から分離された地位にある。よって、罪の性質は、私たちに支配する権威を、もはや、持たない。

② 6節「私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられた」、「罪のからだ」が滅ぼされて」

- 「古い人」は罪の性質。古い人と言う表現は、アダムと関係している。アダムの墮落によって罪の性質が人の中に入り、アダム以降の全人類に受け継がれている。そのことから、罪の性質を「古い人」とも言う。なお、ローマ書では、罪の性質を「肉」と表現することが多い。
- 「罪のからだ」・・・からだは本来、人の肉体であるが、罪の性質が人に罪を犯させる道具になっている。「罪のからだ」の実体は、罪の性質である。
- 「罪のからだ」が滅ぼされて・・・「滅ぼされて」と訳されているギリシア語の意味は、「消滅させられて」ではなく、「無力化されて」である。罪の性質は消滅しないが、信者に対する支配力を失う。それゆえ、信者は自分のからだを罪の奴隷として差し出すのではなく、神の奴隷、義の奴隷として、自分のからだを差し出すことができる。

③ 5節「キリストの復活とも同じようになる」・・・波線部は文法上、未来形であるが、将来のことではない。メシアと共に死んで葬られたら、次はメシアと同じように復活する、という論理的順序を示す未来形である。
この復活は、肉体の復活ではない。その前に経験しなければならない霊的復

活のことである。信者は霊的に復活して、新しいいのちの中で、スピリチュアル・ライフを生きる。

4 節に「キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、新しいいのちに歩む」とある。これも信者の霊的復活のことである。

4. 実践・・・「キリストにある（メシアにある）」という地位は、人が自分の行いや努力で受けるものではない。神のわざであり、神から与えられたものである。しかし、それを受けた信者には、**その地位に応じた責任がある。信者は、何を実践しなければならないか？**

(1) その責任を一言で言えば、「あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物としてささげなさい」（ロマ 12：1）・・・「ささげる」とは、「ゆだねる」、「明け渡す」である。自分のからだを、神の支配に「明け渡す」ことである。ロマ 6：12、コロ 1：21～22 でも教えられている。

(2) 実践を開始することについて教える聖書箇所は、ロマ 6：11～13 である。

- ① ロマ 6：11 *同じように、あなたがたもキリスト・イエスにあって、自分は罪に対して死んだ者であり、神に対して生きている者だと、・・・*

知る・・・メシアの死につながれたことで、私たちは罪に対して死んだ。メシアの復活につながれたことで、私たちは神に対して生きている。このような知識を、まず、神のことばに基づいて知らなければならない。聖書の教えを学ぶ意義は、ここにある。

- ② ロマ 6：11 *・・・だと、認めなさい。*

認める（計算に入れる）・・・メシアに結び合わされたことは真実である。しかし、私たち信者は、そのことを体験したり、感じたりしたわけではない。信者は、そのことを真実であると信仰をもって認めなければならない。「認める」と訳されているギリシア語は、文字通りには、「計算に入れる」である。そのことを計算に入れて貸借勘定を合わせることである。メシアに結び合わされていて、罪に対して死んだこと、神に対して生きていることを計算に入

れて、スピリチュアル・ライフを歩いていくと、用意されていた神の祝福が信者に実際に与えられるのである。

- ③ ロマ 6:12~13a **ですから、あなたがたの死ぬべきからだを罪に支配させて、からだの欲望に従ってはいけません。また、あなたがたの手足を不義の道具として罪に献げてはいけません。**

ささげることを止める・・・12~13節 aにあるように、信者は自分のからだを不義の道具としてささげることを止める。すなわち、自分のからだを、罪の性質に支配される「罪のからだ」のようにしないことである。

- ④ ロマ 6:13b **むしろ、死者の中から生かされた者としてあなたがた自身を神に献げ、またあなたがたの手足を義の道具として神に献げなさい。**

ささげることを開始する・・・13節 bにあるように、信者は自分のからだを義の道具としてささげるようにしなければならない。

- (3) **まとめ**：実践を開始するために、次の3つのステップが必要である。
まず、聖霊のバプテスマによって何が起きたのか、神のことばを通して、事実を知る。
次に、その事実を、真実であると認める、または計算に入れる。
そして、自分のからだを義の道具として神にささげる。

【補足説明を P.52】

5. バランス・・・【神が何でもしてくださる】ではないし、
【人がすべてを行う】でもない、バランスが大切である。
- (1) 【神が何でもしてくださる】という極端に走ったコロサイの教会・・・パウロは、コロサイ人への手紙を書いて、聖霊については一言も言及せずに、スピリチュアル・ライフについて教えた。
- (2) 【人がすべてを行う】という極端に走ったガラテヤの教会・・・パウロは、ガラテヤ人への手紙を書いて、スピリチュアル・ライフにおいて聖霊の働きが重要であると教えた。
- (3) 神も人も関与するのが、スピリチュアル・ライフである。そのバランスを教えるのは、ローマ人への手紙とエペソ人への手紙
- ① ロマ書は、1～8章で、メシアに結び合わされることについて、12～16章でその実践である。(1～5章：義認、6～8章：聖化、9～11章：イスラエル)
- ② エペソは、1～3章でキリストにある地位、4～6章で実践である。

【参考資料】「アダムにある地位」と「キリスト（メシア）にある地位」の比較

	アダムにある地位	キリスト（メシア）にある地位
死との関係	死の恐怖によって一生涯、奴隷としてつながれている（ヘブル 2：15） 死に支配されている（ロマ 5：17）	死からいのちに移っている（ヨハネ 5：24）、地上の幕屋を脱ぎ捨てる（II ペテ 1：14）、生きることはキリスト、死ぬことは益です（ピリ 1：21）
義との関係	義とは認められない（ロマ 3：9、20）。 将来、死者たちの裁きにおいて受けるのは、有罪宣告（黙 20：12）。	信じたときに、完全に義なる者と認められ（ロマ 3：22、24）、 <u>永遠のいのち（新しい性質）</u> をいただいている（ヨハネ 3：6、36）。これを義認という。
日々の生活	罪の奴隷である（ロマ 6：16）。 本人は気づいていなくても、罪の性質に支配されている（ロマ 6：20～21）。	<u>義の奴隷</u> である（ロマ 6：18） 罪の性質の力から分離され、神の支配の下にある（ロマ 6：17～18、22）。 キリストに似た者へと変えられていく（II コリ 3：18）、これを <u>聖化</u> という（II テサ 4：7）
肉体の死の時 第一の死	サタンが死の時を決める（ヘブル 2：14） 霊魂は、よみ（ <input type="checkbox"/> シェオル、 <input checked="" type="checkbox"/> ハデス）に落ちて、苦しむ	キリストが死の時を決める（I テサ 4：14）、霊魂は天のパラダイスへ迎えられる（II テモ 4：18）。このとき、その人の霊魂から罪の性質はなくなる。
第一の復活の時		教会の携挙（*1）（I テサ 4：13～17）のときに、栄光の体（*2）を受ける。 これを栄化という。 <u>永遠のいのち</u> に行き着く（ロマ 6：22）
メシアの王国		メシアと共に共同統治者となる。
第二の復活の時	よみから引き出され、朽ちない体に復活するが、栄光の体ではない。死者たちの裁きを受ける（ヨハネ 5：29）。	
永遠の行先	火の池（ゲヘナ）（黙 20：10～15） 永遠の滅び、永遠の刑罰（ 第二の死 ）	新しい天と新しい地（黙 21 章） 神と人が共に住まう都

(※1) 第一の復活には順番がある。①イエス、②教会の信者、③二人の証人、
④旧約の信者、⑤大患難期の信者。教会の携挙のときに、教会の信者は復活する。

(※2) 「栄光の体」に関して

復活のときに私たち信者が受ける体を「栄光の体」と呼ぶのは、次の聖書箇所による。

I コリ 15 : 43 卑しいもので蒔かれ、**栄光あるものによみがえらされ、**

ピリピ 3 : 21 キリストは、万物をご自分に従わせることさえできる御力によって、私たちの卑しいからだを、**ご自分の栄光に輝くからだと同じ姿に変えてくださいます。**

私たちの復活の体に輝く栄光は、神の栄光である。

ピリピ 1 : 10~11 あなたがたが、キリストの日に備えて、**純真で非難されるところのない者となり、イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされて、神の栄光と誉れが現されますように。**

また、復活の体は、文字通り、神の栄光を受けることのできる体である。
今の私たちの「罪のからだ」は神の栄光にさらされると、死ぬしかない。

ロマ 3 : 23 **すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず、**

神によって造られた人が、神の前に出られない。それは罪のゆえであった。

神にとって罪人は「**失われた者**」(ルカ 19 : 10) である。

メシアによる罪の贖いのみが、罪人を救う。この方以外に救いはない。

私たちの永遠の行先、神と人が共に住まう都には、神殿はない(黙 21 : 22)。神の栄光を覆う遮蔽物はもはや、必要ないのである。

【P.48 の補足】 「知る→認める→自分のからだをささげる」というステップは、他の箇所でも表現を変えて、繰り返し教えられている。

1. ロマ 6 : 17~19 **神に感謝します。あなたがたは、かつて罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規準に心から服従し、罪から解放されて、義の奴隷となりました。あなたがたの肉の弱さのために、私は人間的な言い方をしています。以前あなたがたは、自分の手足を汚れと不法の奴隷として献げて、不法に進みました。同じように、今はその手足を義の奴隷として献げて、聖潔に進みなさい。**

(1) 「伝えられた教えの規準」・・・使徒たちの教えである。今の私たちにとっては、新約聖書に書かれた教えである。

(2) 信者が霊的な生き方をするためのステップは、やはり3つのステップである。

「使徒たちの教えを知る→それに心から服従する→手足を義の奴隷として献げて聖潔に進む」である。

2. ロマ 6 : 4 **新しいいのちに歩む**

(1) 「自分のからだをささげる」という外側の行為は、内側においては、罪の性質に従わず、**【信じたときに聖霊によって与えられた新しい霊 (ヨハネ 3 : 6)、すなわち新しい性質】**に従って、考え、決断し、行動することである。

(2) このことを、表現を変えて教えているのが、「新しいいのちに歩む」(ロマ 6 : 4)である。「新しいいのち」、これも新しい性質を指す。

(3) ロマ 8 章では、「**肉に従わず、霊に従って生きる**」と表現している。「肉」とは罪の性質、「霊」とは新しい性質である。

3. ロマ 8 : 13 **霊によってからだの行いを殺す**

(1) 新改訳聖書では、「霊」は「御霊」と訳されているが、ギリシア語原文は、定冠詞なし・頭文字小文字の「霊」、すなわち新しい性質である。信じたときに聖霊によって与えられた霊、新しい性質、新しいいのちのことである。

(2) 信者は新しい性質に従って、からだを不義の道具とせず、むしろ義の道具として神にささげるよう、勧められている。

4. このように表現や視点を換えて、同じことを繰り返し説明するのは、ヘブル的書き方の特徴である。